

# ② ネットワーク化による新たなコミュニティの形成

## 1 パソコン通信ネットワークと電子コミュニティ

### ① パソコン通信の広がり

わが国において、パソコン通信が本格的に普及し始めたのは、一九八五年のいわゆる通信の自由化以降のことである。同年四月に電気通信事業法が改正され、通信網に付加価値をつけて提供するVAN(Value Added Network)事業が解放された。パソコン通信は、VANの一つと位置づけられるものであり、法改正を機に多くのパソコン通信ネットワークがサービスを開始している(現在、国内最大手であるPCIVANは一九八六年に、またニフティサーブは一九八七年にサービスを開始している)。コンピュータネットワークは、もともと米国ARPANET(一九六九年開始)に源を発すると言われるが、パソコン通信事業者の代表的存在であるCompuServeがサービスを始めたところには、現在のパソコン通信ネットワークと同様のサービスを提供するようになっていった。わが国の二大パソコン通信ネットワークであるPCIVANやニフティサーブのサービスも、CompuServeを模したものであった。法改正以降10年を経過した現在、

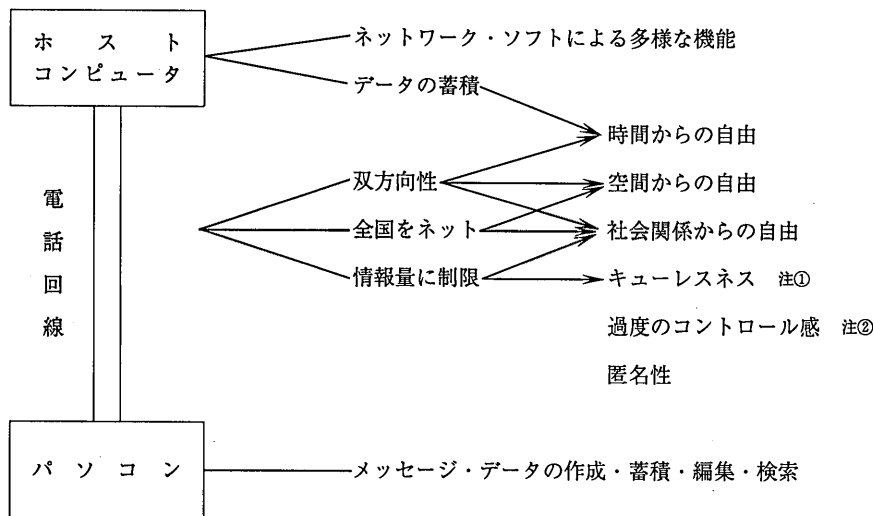
両ネットワークはいずれも加入者百万件を達成しつつあり、パソコン通信人口は確実に、かつ急速に増加してきている。さらに近年になると、インターネットへの接続が可能なパソコン通信ネットワークも多く見られるようになり、ネットワーク人口はさらに増加の一途をたどりつつあると考えることができる。

### ② パソコン通信のメディア特性

#### ⑦ パソコン通信の基本的構成

では、パソコン通信とはどのようなメディアなのであろうか。図-1に示すように、パソコン通信は、ホストコンピュータとそれぞれのパソコンを電話回線で接続することによって実現されるネットワークである。この図では、ホストコンピュータとパソコンが一对になっているが、実際は一つのホストコンピュータに多くのパソコンがつながっており、星型のネットワークとなっている。利用者は、自分のパソコンからホストコンピュータに電話回線を介してアクセスすることにより、他の利用者への電子メールを出したり、自分宛のメールを読んだり、電子会議室に登録されている情報を見たり自分の意見を登録したり、あるいはまた他の多くの機能を利用することになる。

図-1 パソコン通信の機械とメディア特性



(出典：古川，1995)

1 パソコン通信ネットワークと電子コミュニティ  
 2 電子コミュニティのもたらすもの  
 3 電子コミュニティの限界と課題

④ 多くの機能を持つメディア

パソコン通信のメディア特性の一つは、このように多くの機能の一つのメディアの中に実現していることである。これは、ホストコンピュータがネットワークを管理しているため、プログラム次第で複数の機能を提供することができるからである。テレビや電話など旧来のメディアが、基本的には単一の機能しか持たなかったのは大きく異なる点である。

こういった機能は、他の利用者とメッセージや情報のやりとりを行う「コミュニケーション」、ニュースやデータベースを用いて情報収集を行う「インフォメーション」、予約やオンラインショッピングなどの「トランザクション」の三つに大別されるが、実際の利用はコミュニケーション機能が中心になっているようである。

コミュニケーション機能は、さらに電子メール、電子会議、電子掲示板、CBシミュレータ(チャット)に分けることができる(表1)。  
電子メールは、特定の相手宛にメッセージを送るものであり、基本的には一対一で報のやりとりが行われる。電子掲示板は、駅や銀行の掲示板に類したものでありパソコン通信ネットの加入者であれば誰でも情報を見ることができると一対不特定多数である。言える。電子会議は、この中間的な存在であるが、テーマ別のコーナーが設けられており、そのテーマに関心を持つメンバーだけがメッセージを登録したり読んだりするものであり、一対特定少数でのコミュニケーション形態を取っている。これら三つの機能は、いずれも

情報の発信者がホストコンピュータに一度メッセージを登録し、他のメンバーはその後にホストコンピュータにアクセスした際、そのメッセージを読むことができるため、情報の伝達には多少なりともタイムギャップが生じる。これに対してCBシミュレータは、ホストコンピュータと同時にアクセスしているメンバー同士が「筆談」できるというものであり、全く見ず知らずの相手とのコミュニケーションもできれば、あらかじめ特定のメンバーで申し合わせておけば仲間とのリアルタイムでのコミュニケーションも可能である。このため、CBシミュレータは一対特定少数の場合もあれば、一対不特定少数の場合もあり得るのである。

⑤ 電話回線がもたらす特性

パソコン通信のもう一つの特色が、電話回線を用いていることである(図1)。

電話回線を用いることには、三つの意味がある。まず第一は双方向性があるということである。パソコン通信を行う場合、直接やりとりするのはホストコンピュータであり、双方向性といっても物理的にはホストコンピュータとパソコンの間の双方向性である。しかしながら、ホストコンピュータには他のメンバーからのメッセージや情報がストックされており、これを受信しあるいは自ら情報を発信することによって、他者との双方向コミュニケーションが行われることになる。しかも、直接の通信相手はホストコンピュータであるため、利用者の都合のいい時間にアクセスすることができる。つまり、情報を発信する場合だけでなく、情報を受信する場合にも都

合のいい時間に利用できるのである。同じ電話回線を用いるのでも、発信者優位の電話とは、この点で大きく異なる。いわば、時間からの自由が確保されているのである。

また、電話回線は全国に整備されており、電話を利用できる場所であればパソコン通信にアクセスすることが可能である。しかも、ホストコンピュータが情報をテーマ別に蓄積できることなどから、自分と共通の関心や興味を持つ他者と接する機会が生まれる。例えば、ニフティサーブの心理学フォーラムには、いくつかの電子会議室が設けられている。それまでお互いに相手のことを見ず知らずであった北海道の人と沖縄の人が、共に心理学に興味を持っていた場合、このフォーラムの会議室での情報やメッセージの交換を通じて、知合いになるということも有り得る。従来であれば空間的に離れているが故に生涯知り合うこともなかったと考えられる者同士でも、パソコン通信の場では知り合える機会があるのである。

一方、電話回線を用いることは、情報伝達スピードに制限があることをも意味する。テレビのような動画情報を伝達するためには、一秒間に三十枚前後の静止画を送らなければならぬ。しかしながら、電話回線を用いるFAXでは静止画一枚を送るのに十秒前後かかってしまう。つまり電話回線を用いる以上、動画の情報伝達は困難なのである。また、直接コミュニケーションするのがコンピュータ同士であることから、パソコン通信は基本的には文字中心のメディアとならざるを得ないのが実状である。このことが、匿

表一 パソコン通信機能の特色

	コミュニケーション形態	タイムギャップ
電子メール	1 対 1	有
電子会議	1 対 特定少数	有
電子掲示板	1 対 不特定多数	有
CBシミュレータ	1 対 (不)特定少数	無

名性やコミュニケーションにおける情報不足といったようなマイナスの側面をもたらすことになる。

### ③ パソコン通信ネットワークと電子コミュニティ

パソコン通信を利用していくうちに、特定のメンバーとの間で情報やメッセージのやりとりを行う集団が形成されていくことがある。電子会議では、予め決められたテーマに関心を持つ人だけがアクセスするのであるが、その中でもメッセージや情報を頻繁に交換するメンバーは限られており、ある程度固定化していることが多い。こういった集団は、パソコン通信上で電子的なコミュニティを形成していると考えることができる。

従来、コミュニティという言葉には多種多様な定義が与えられており、定番といえるようなものはないが、ヒラリーはこれらの定義に共通する要因として、①一定の地理的領域を伴うこと、②構成員相互の交流があること、③共通の目標・関心事等の絆が存在すること、を挙げている。ところで、このうち①の要因は②や③に付随して発生するものであると考えることができる。すなわち、共通の関心事を持つメンバー同士が、相互にコミュニケーションを行い交流を保つために、一定の地理的領域の中に居住していることが求められた訳である。逆に言えば、②③が満たされるのであれば、①の要因にはそれほどこだわる必要はないと考えることができる。

パソコン通信では、②と③の要因は満たしているが、①の要因は満たしていない場合

が多い。これは、パソコン通信では地理的制約を受けることなく利用できるためであり、一定の地理的領域を伴わなくても、共通の目標・関心事を持つメンバー同士は相互に交流できる。従って、パソコン通信上のものも電子的なコミュニティと位置づけることができるはずである。ところで、電子コミュニティは電子会議室の中だけに限られるものではない。共通の関心事を持つ者同士が電子メールでやりとりをしている場合や、ニフティの「ホームパーティー」なども、電子コミュニティに該当するものと考えることができる。

## 2 電子コミュニティのもたらすもの

こういった新しいコミュニティは、市民生活にどのような影響をもたらしているのだろうか。ここでは、電子コミュニティの特性（その多くはパソコン通信というメディアの特性に由来するのであるが）に鑑み、いくつかの可能性について検討してみる。

### ① 都市生活者と電子コミュニティ

「コミュニティ」という言葉が、日本語では「地域社会」と訳されてきたことからもうかがえるように、従来のコミュニティは、町や村などの一定の地理的領域の中に限られることがほとんどであった。ところが、都市においてはこういった地域社会そのものが成立しにくい状況にある。都市化が進むにつれ、外部から転入してくる新住民が多くなり、隣近所にどんな人が住んでいるのか、場合によっては名前すら知らないということが日常茶飯

事となっているからである。たとえ、同じ町や村あるいは同じマンションの中に住んでいる者同士でも、相手がどんな人かがわからなければ、共通の関心を持ちにくいであろうし、例え同じ関心事を持っていてもそのことに気付くこともない。お互いのプライバシーを尊重することが優先されるため、互いにできるだけ干渉せず、相互の交流を避けようとするもののほうが多いと考えられるのである。

パソコン通信は、こういった都市生活者にとって新しい形でのコミュニティ参加を可能とする。パソコンと電話回線がある場所であればどこにいても利用できることから、同じ事柄に関心を持つ全国の人とコミュニケーションすることが可能なのである。つまり、電子的なコミュニティでは、隣に住んでいる人のことは知らなくても、全然別の場所に住んでいる人とメッセージや意見の交換をすることができるのである。

たとえば、あるテーマに関心を持つ人が、そのテーマの電子会議室で他のメンバーに「出会う」場合を想定してみよう。まず、その電子会議室にアクセスし、他のメンバーが登録したメッセージを読む。どんな人が書いているのか、どこに住んでいる人が書いているのかは分からないが、自分も興味を持っているのかは分からないが、自分も興味を持っている話題なので、このうちのどれかのメッセージに対して自分の意見や情報をコメントとして登録する。すると、最初のメッセージを登録していたメンバーや、場合によっては他のメンバーからコメントが返される。そして返ってきたコメントに対し、再びコメントを返す……こういったことを繰り返すうちに、頻繁に

メッセージを交換しあう集団が形成されていく。つまり、電子コミュニティは「地縁」ではなく「情報縁」に依拠するコミュニティであると考えられるのである。

ところで、パソコン通信はこういった全く新しいコミュニティを作り出すばかりではない。既存の社会集団のコミュニケーションを補完するという役割も果たし得る。つまり、共通の目的ないし関心事が地域の問題である場合、電子コミュニティであつても一定の地理的範囲を伴うことになる。例えば、町内会などのような既存のコミュニティにおける情報の伝達にも有効であると期待される。もちろん、町内会メンバー全員に普及してはいないと考えられるが、パソコン通信を利用できるメンバー同士で情報の交換を行ったり、問題についての議論を行うなどの活用は可能である。この場合、集会所などに集まらなくても、意見を持つ人が時間に拘束されることなく町内会活動に参加することができるというメリットがある。

また、例えば環境問題について何らかの考えを伝え、社会や行政に働きかけようとする場合、個人レベルではまとまった活動を展開することは困難である。しかし、同じ問題意識を持つ市民が電子コミュニティを介して意見や情報を交換し、共通の活動を展開することによって、町や市や県域における広がりを持った活動を進めることが容易になるものと期待される。こういった場合、会合などによって直接メンバー同士が会う必要が少なくてすむことから、町内会よりは広い範囲である市や県に住む人々までもがコミュニティに参加

し得るものと考えられる。

## ② 多様な生活時間への対応

都市生活者にとって、電子コミュニティの持つメリットは他にもある。都市には、多くの職業が存在し、多様な職種に就いている人々がいる。二十四時間眠らない街、とまではいなくても、朝早くから深夜まで都市は活動しており、その活動を支える職業に就いている人々は早朝に働く人もいれば、残業などで深夜にかけて働く人もいるわけである。また、近年では通勤ラッシュを緩和する目的もあつて、出社時間を就労者自身が設定するフレックスキングが導入されることも増加しており、同一職業であつても就労時間のズレが許容される余地が大きくなつてきている。

こういった就労時間の多用性に対応して、生活時間も多用化するのが都市の特色の一つであろう。早朝から働く人々は早起きするのも早く、一日のなかでも比較的早い時間に仕事から解放され自由になるであろう。反対に、就労時間が遅い人は、深夜まで働く代わりに朝はゆつくりできるであろう。そしてもちろん、早朝から深夜まで働くという人もいるのである。

こういった多様な生活時間を内包する都市生活者が、共通の関心を持つ他の人間と連絡をとろうとする場合、相手の生活時間帯とどれだけ一致しているかということが大きな問題となる。例えば、電話で相手に連絡を取ろうとしても、自分は朝が都合がいいのに相手は深夜でないとかまらない、という事態が起り得る。もちろん、全く手段がないわけ

ではなく、留守番電話や伝言という手段を使ったり、場合によっては仕事中に相手を呼び出すといったこともないわけではない。しかしながら、伝えたいことを十分伝えきれなかったり、なかなか相手をつかまえることができないということになりかねない。

これに対して、パソコン通信を介して連絡を取ることができれば、相手がどんな生活時間を持っていたとしても、自分の伝えたいことを、相手に気兼ねすることなく伝えることができる。なぜなら、自分のメッセージは一度ホストコンピュータに蓄積され、相手は都合のいい時間にそのメッセージを読むことができるからである。つまり、相手が起きていようが寝ていようが相手にメッセージを送ることが可能なのであり、同時に、メッセージを送った人間が起きていようが寝ていようがメッセージを読むことも可能なのである。

## ③ 新たな社会参加の可能性

電子コミュニティの持つもう一つの特徴は、電話回線とパソコンがあればどこにいても参加することができるということである。これは、電子コミュニティが地理的に広い範囲にわたることを意味する他に、これまではコミュニティに参加できなかった人々にも参加の機会を提供することを意味する。

従来の地域コミュニティでは、いかに狭い範囲内のものであつても、他のメンバーと相互作用すなわち相互にコミュニケーションを行うためには、集会所等に出かけたり、あるいは相互に相手のところに行つて情報交換をしたりする必要があつた。こういった活動は、

基本的には自由に出かけられる人を前提とした活動であるといえる。このため、身体障害者やその介護者、高齢者、主婦など、家庭内に閉じ込められがちの人々はなかなかコミュニティに参加できなかったのである。

例えば、足の不自由な方が集会などに車椅子を用いて出かける場合、階段やちよつとした段差など、途中の道のりには車椅子の通行の邪魔になるものが数多くある。コミュニティに参加するために出かけるにも、かなりの労力がかかるし、出かけることが億劫に感じられるのではないかも考えられる。電子コミュニティであれば、戸外に出かける必要はなく、パソコンのキーボードをたたくだけで済む。つまり手と目を使うことができれば、共通の関心事を持っている他の多くの人々と全く同じ条件で電子コミュニティに参加することができるのである。また、現在はキーボードによる入力が高齢者であるが、音声入出力など他の入出力方法が確立されれば、目の不自由な方にもその可能性が開けることになると考えられる。

高齢者にとつても、現在の都市は外出することをためらわせるような要因が多くある。通勤ラッシュの時間帯はもとより、昼間でも電車やバスは混んでおり、シルバースーツに若者が平気で座っているという光景をよく見かける。また主婦も、家事や育児などに追われてまとまった時間を作りにくいため、地域以外のコミュニティに参加する機会はなかなか得にくかったと言える。こういった高齢者や主婦なども、パソコン通信を介することによって、家庭に居ながら、新しいコミュニティ活

動に参加することが可能となるのである。

#### ④ 1 新しい広報・広聴

電子コミュニティを、既存の地域コミュニティの補完としてとらえた場合、行政との間に新たな情報の共有形態が存在すると考えられる。パソコン通信ネットワークの中には、行政が積極的に情報を提供し、あるいは市民からの問い合わせや意見を受けているものも少なくない。つまり広報と広聴がパソコン通信上で行われているのである。もちろん、これだけであればこれまでの広報・広聴活動がメディアを変えただけの話であるが、メディアがパソコン通信に変わることによって、これまでの広報・広聴とは異なる側面が出てきている。

第一は、情報の更新頻度である。従来の広報紙では、月に一度か二度程度の頻度で情報を提供してきたわけであるが、パソコン通信による情報提供では毎日情報を更新することができる。また、情報をホストコンピュータにストックしておくことによって、過去の情報をも提供することが可能となる。とかく広報紙は、古新聞といっしょに処分されてしまいがちであるが、パソコン通信では必要な情報をいつでも引き出せるのである。これが第二の特色である。第三の点としては、自治体やその首長に対して市民が直接意見や問い合わせを行えるということが挙げられる。行政に対する苦情や意見などは、これまで窓口を経由したり、電話で受け付けるなどの方法によって受け入れられてきた。パソコン通信によるものは、基本的には異なる媒体で同じ

ことを行っているわけであるが、文章にするため伝えたいことを整理した上で伝えられる、対面しなくてもすむことから言いたいことを自由に書ける、自分の都合のいい時間に伝えられる、などのメリットがあると考えられる。その一方では、広報紙のような一覧性がない、利用できる市民に限られる、などの問題もあり、少なくとも現段階では、既存の広報・広聴活動を補完するものと位置づけるのが妥当であろう。

ところで、電子コミュニティは地域社会の補完というだけでなく、先に述べたようにより広い範囲にまで広がっていく可能性を秘めている。すなわち、回線がつながっているところであればどこからでもアクセスできるのであり、言い換えれば、どこもコミュニティにもアクセスできることになる。これは、国内に限定されるわけではなく、海外のネットワークに直接アクセスしたり、インターネットを経由してアクセスすることが可能なのである。すなわち、一人の市民は、地理的な領域にとらわれることなく、多くのコミュニティに多重的に参加することができるわけである。

#### 3 1 電子コミュニティの限界と課題

ここまでは、電子コミュニティの良い点を中心に紹介してきたが、デメリットが無いわけではない。まず第一は、基本的には文字中心であることである。伝達する情報が文字であることのメリットもあるわけであるが、文字だけということになると、伝えたいことを十分伝えきれない、相手のリアクションが分

かりにくい（キューレスネス）、などの問題が生じてくる。さらに、相手のリアクションが分かりにくいということは、コミュニケーションプロセスに対する解釈が、自分の思い込みで行われる（過度のコントロール感）可能性があることを意味する。例えば、自分は軽い冗談で言ったことが相手を怒らせている場合でも、相手のリアクションがわからないためにさらに畳み掛けるように冗談を言って相手を怒らせてしまうということもあり得る。コミュニケーションのメンバー間のコミュニケーションが対面で行われる場合、非言語情報が重要な役割を果たすのであるが、電子コミュニティでは非言語情報を利用できないため、こういったトラブルを招くことがあり得るのである。

文字中心であることに加えて、どこからでもアクセスできることよって、電子コミュニティでは匿名性を保つことが容易となる。本名提示を義務づけけないというものも少なくないし、たとえ名前を名乗っても、本当にそれが本名なのか、またその名前の本人がメッセージを発信しているのかを確認することは困難である。こういった匿名性は、一方では既存の社会的地位にとらわれずにコミュニティに自由に参加できるというメリットをもたらす。高齢者が若者に混じって話したり、対等に議論していた相手が実は平社員と社長であるということも起こり得るのである。しかしながら他方では、匿名ゆえに相手を中傷したり、反社会的発言をしやすくなるというデメリットも大きいと言わざるえない。

パソコン通信を介した新しい電子コミュニティには、ここで述べたような問題がまだ未解決のまま残されているが、既に紹介したように多くの可能性を秘めているのも事実である。そして、ネットワーク人口が増加し、あるいは入出力技術が向上し、インターネットなどによつてネットワークの広がりが増していくにつれ、その可能性はさらに拡大し続けていけると言える。こういった可能性を育むためにも、現在どのような問題があるのかを認識し、これを徐々にでも解決しつつ、電子コミュニティの発展を支えていくことがこれからの行政には望まれるのではなからうか。

〈常盤大学専任講師〉

注① キューレスネス

対面コミュニケーションの場合は、自分の話が相手にどのような影響を与えたかを相手の視線、表情、身振りなどの非言語情報（＝キュー）から把握することができ、パソコン通信では相手が見えないため、このキューが得られない状態になる。これがキューレスネスである。

注② 過度のコントロール感

キューレスネスによつて、発言者がコミュニケーションの進行過程について過度のコントロール感をもつこと。例えば実際には誤解が生じているのに、自分の意図どおりにコミュニケーションが進んでいると感じるような場合がこれに該当する。